

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第122号 2025年2月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム スナックの新聞記事やアニメ作に想う － 令和時代に、昭和の薫りが漂って －	谷本 宗生	2
大正時代の女子高等教育(71) 金城女子専門学校	長本 裕子	4
大東文化大学『大学改善委員会報』第24号(1983年11月) － 新学部の増設と大学の展望 －	谷本 宗生	9
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(11): 『全国学校案内』(明治42年)	吉野 剛弘	11
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(4) 木下広次による第一高等 中学校寄宿舎自治制導入に関する嘉納の見解(その2)	富岡 勝	13
神辺靖光会員邸における研究交流会(2025年2月2日)の報告	雨宮 和輝	16
刊行要項(2015年6月15日現在)		23
短評・文献紹介 布施賢治著「庄内と育英事業」(谷本)、北村隆 志・木村孝・澤田章子著『名作で読む日本近代史』(長本)、映 画「小学校 それは小さな社会」(富岡)		24
会員消息 谷本、山本剛、富岡		26

## コラム

### スナックの新聞記事やアニメ作に想う — 令和時代に、昭和の薫りが漂って —

たにもと むねお  
谷本 宗生

(大東文化大学)

## アニメ・スナックバス江から

昨日、普段はみないジャンルのアニメ作品を何気にみてしまい、ちょっと考えさせられてしまいました。アニメ作品『スナックバス江』は、札幌郊外にあるという場末感のスナックバス江を

舞台にした、バス江ママ(声優:齊藤貴美子さん)やチーママ・明美(声優:高橋李依さん)と、そこに集う客らとのひとコマ・人間模様が興味深いギャグストーリーだ。放映第一話(第一夜)の後半の件「男って……」では、常連客の森田(声優:岩崎諒太さん)が、チーママ明美らと会話を交わすシーン、なにか面白い話を挙げて!と急かされた森田が、時間停止アプリ(スマホ)を購入したと語る。さらに少年のように、エッチな男心をくすぐられるからといって、服が透ける?というメガネや透明人間?になれるサプリ(薬剤)なども購入したと、なぜか森田は自慢気に語るのです。チーママ明美からいろいろ諭されても、ぜんぜんめげない森田の姿をみて、奥の手を明美が繰り出す。面倒くさい森田に歌え!という。それに対し、森田は歌わないので、明美に自分が元気になるような歌を、ぜひ歌ってほしいと懇願します。すると、なぜだか明美は〇〇〇〇をたっぷり感情込めて歌い上げます。続きは、ぜひ漫画やアニメなどで、オチや内容展開をご確認いただければ幸いです。一見するとちょっとバカバカしい印象もしますが、不思議と憎めない、なぜか懐かしい・昭和世界の各地で数多く存在したという、場末のスナックを舞台とした庶民らの人間模様が描かれていました。

## 東京新聞の記事(社交場を守る・新卒でスナック継ぐ)から

2024年1月7日付の東京新聞の18面記事「社交場を守る 新卒でスナック継ぐ」を読みました。記事によれば、東京国立にあるスナック水中(日常から離れて水中に漂い、リラックスしてから地上に戻る姿をイメージして)を、スナックでの

アルバイト経験が少しあって一橋大学を卒業した坂根千里さんが、親族でも従業員でもなかった第三者で受け継ぐ「第三者承継」で、二〇二二年春にリニューアルオープンしたのだといいます。元の店からの常連客も一部は変わらず通ってくれて、坂根さん(ちりママ)が引き継いでからの新規客も合わせ、年に延べ五千名以上が店を訪れている・・といいます。なお帝国データバンク調べによれば、後継者不在のためによる倒産数は、二〇二三年には五〇〇件以上もあり、過去最多を更新しているそうです。コロナ禍もあって、あれだけ各地に数多くあったスナック自体もやはり減少している模様だ。さらに坂根さんはとてもバイタリティーもある人物のようで、後継者のいない各地のスナックやバーの承継を目指し、二〇二三年三月には株式会社水中を設立したのだという。同市内の二店舗目として、ミュージックバーの承継も決まり、二四年四月にはリニューアルオープンの予定とのよし。現在でも、都内の四軒から相談を受けているといいます。今後一〇年間で、全国一〇〇軒の承継を目標に掲げています。

坂根さん(ちりママ)が、自身が学生時代にスナックで飲んでいる際に、「この街で、私は一人じゃない」と実感したのだそうです。坂根さん(ちりママ)いわく、「なにか嫌なことがあっても、男性も女性もみんなで飲んで歌って『明日も頑張ろう』と思えるような街の社交場をつくりたい」と。お客さんとの繋がり・絆を大事にするという昭和のスナック文化を底流に持ちながらも、新たに女性やいちげん客さんらも気軽に入店しやすいような、開放的な空間・社交場をイメージし工夫しているのだ・・と強調しています。

### **私・谷本の学生時代及び若手研究者時代の思い出から**

そういえば、私・谷本自身も学生時代及び若手研究者時代には、二次会などでよく先生がたや先輩ら、彼ら行きつけのスナックやバーに連れて行ってもらった思い出が懐かしいです。都内での話はさておき、金沢大の助手だった時分、市内片町にある場末感の小さなスナックに、親しい先輩職員らと一緒によく通っていた記憶があります。もうその店はかなり昔に閉店されたのですが、店に通っていた当時は、不思議と居心地?がよかったのかとも思います。なぜでしょうかね。

## 大正時代の女子高等教育(71)

### 金城女子専門学校

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

1889(明治22)年9月、米国南長老教会の宣教師アニー・ランドルフが、名古屋区下堅杉町で、R・E・マカルピンの協力を得て、女学専門<sup>まぼろかみ</sup>冀望館を創立した。マカルピンは、米国南長老教会の宣教師で、名古屋にミッション・ステーションを開設した人物である。マカルピンの自宅で、一般の既婚・未婚の女性対象に英語、音楽、編物、洋服裁縫などを、主に女性宣教師たちが教えた。最初の生徒は3名であった。これが翌年「私立金城女学校」となる。当時は、小学校教育以上に女子を教育する必要はないという世論が一般的で、金城女学校は中部日本における数少ない女子教育の場であった。1927(昭和2)年、「専門学校令」による金城女子専門学校に昇格し、中部日本で唯一の女子高等教育機関となった。現在の金城学院大学の前身である。



創立者アニー・ランドルフ  
(『目で見える金城学院の  
100年史』より)

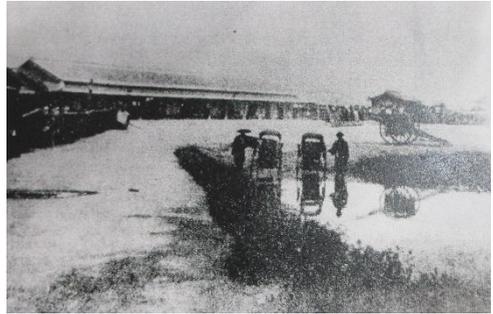
また、金城女学校は、大正の終わりから昭和時代に、女学生の象徴となったセーラー服を日本で最初に制服として取り入れた学校である。まずは、金城女学校が開校されるに至った当時の状況をたどってみよう。

### 1887(明治20)年ごろの名古屋

1885(明治18)年5月、米国南長老教会外国伝道局はジャパン・ミッション創設を決議し、R.E.マカルピンとR.B.グリナンを派遣した。二人は同年12月1日

横浜に上陸した。1887年10月、グリナンは高知に赴任し、マカルピンは名古屋で伝道を開始することになった。

1887年ごろの名古屋は、日本で第四の都市で、人口は約32万5,000人、陸軍第三師団が置かれている軍都であった。横浜へは毎日汽船が通い、東海道線の全開通（1889年7月新橋～神戸間）も間近く、京都・大阪・神戸と結ばれ、数時間で行けるようになる。名古屋は将来性のあるミッションステージと



ランドルフが名古屋に来たころの名古屋駅  
1889（明治22）年  
（『目で見える金城学院の100年史』より）

思われた。当時名古屋在住の外国人宣教師は一人もいなく、ときたま巡回するオランダ改革派とメソジスト監督派の宣教師たちによって伝道が行われていた。教会は小さな一致教会と美以教会があるだけであった。

当時の名古屋には浄土真宗の多くの寺院があった。1888（明治21）年2月、大日本帝国憲法が発布された。憲法に信教の自由を認めながら、明治初年以来の欧化主義に対する反動時代となり、キリスト教に対する偏見は強く、

連日連夜仏教徒によるキリスト教攻撃の説教や、教会の襲撃、夜間の説教中ランプをめがけて石を投げつけたり、窓ガラスを割ったりなどの乱暴狼藉があった。

（『金城六十年史』より）

という。

### 男子の冀望館から女学専門冀望館へ

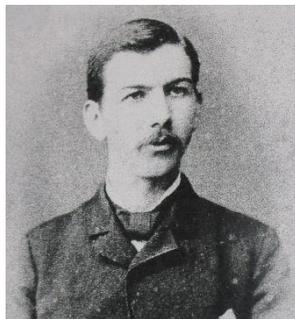
1887年11月に開校された冀望館は当初、男子対象の夜学英语学校であった。当時は外国人が居留地以外でキリスト教伝道を行うためには、日本人の「御雇教師」にならなければならなかった。マカルピンの雇主は、医師張順造であっ

た。冀望館館長阪野嘉一が、宣教師マカルピンを英語教師に依頼し、矢場町の日本家屋で開校したらしい。1888年夏、下堅杉町54番戸の敷地に新築された二階建洋館に移転する。二階はマカルピン夫妻の住居であった。同年夏、マカルピン夫妻は夫人の出産のために神戸に赴き、アニー・ランドルフと出会った。マカルピン夫人の出産に、マカルピンの姉ポーリン・デュボースが中国から手伝いに来ていた。ランドルフとポーリンはかつて一緒に中国に派遣されたいわば同僚であった。

アニー・ランドルフは1872(明治5)年5月から中国杭州の女学校長に就任し、16年間務め、病気のため帰国命令を受けて、1888年1月、帰国途中神戸に立ち寄った。神戸には元中国宣教師だったジェームス・W・ランバス夫人がいたからである。ランドルフは神戸の気候風土が合ったのか、半年間の療養で健康が回復した。そこで、マカルピンは尊敬するランドルフに名古屋で療養するように勧めた。同年9月、ランドルフは1年間の予定で名古屋に入った。60歳を超えていたが、小学校卒業後の女子教育に手をつけられていない土地と知り、意欲が湧き、言語も風俗もわからない異教徒の中心地に、女学専門冀望館を創立した。

### 女学専門冀望館から私立金城女学校へ

話は少し戻るが、アニー・ランドルフの女学校創設に協力したR・E・マカルピンは、1885(明治18)年12月、米国南長老教会から日本に派遣され、横浜に上陸した。翌年1月、高知を訪れ、高知教会の長老たちとジャパン・ミッションの伝道地を高知に開設した。1887(明治20)年6月、南長老派ミッションは名古屋に第二伝道地開設を決定した。同年10月、マカルピンは、在米オランダ改革派教会のジェームズ・バラの次女アンナと結婚し、夫妻で名古屋に入った。マカルピ



創立協力者 R.E.マカルピン(『目で見える金城学院の100年史』より)

ン夫妻は、南長老派ミッションとオランダ改革派ミッションより正式に名古屋伝道地の委譲を受け、名古屋にミッション第二の伝道地を開設した。そして、アニー・ランドルフの女学校創設に自宅の一部を提供して、協力した。

ランドルフは、マカルピン夫妻の敷地内に、自費で二間の平屋を建てて「自給」学校を目指した。そうして1889年9月、女学専門冀望館の創立者となる。3人の女性徒で始まった。しかし、確認できる届出は、「冀望館規則変更」で、それによると1889年夏、男子校だった冀望館は廃校にし、女子昼間学校、寄宿学校に変更された。同年11月、児島亀土が女学専門冀望館初代館長に就任した。翌1890年2月、カンバーランド長老系の紅楓女学校と合併し、同年4月、校名を「私立金城女学校」と改称したが、通称「ランドルフの学校」と呼ばれていた。実質的にはランドルフが校長の働きをしていたであろうが、届け出文書は児島亀土が校長となっている。

修業年限は予科3年、普通科4年。予科修了者は普通科に入学。予科の入学資格は尋常小学校4年卒業。別に音楽科を設置した。毎朝、讚美歌、聖書朗読、祈禱、主の祈りで礼拝を終え、巻一から巻五までのリーダーで英語を学び、文法や会話も学んだ。日本語の授業には地理と数学があった。また、毎日午後2時から有志のバイブルクラスがクラスに分けて行われた。金城女学校が始まると、生徒数は増えた。そのため1890年5月、マカルピン夫妻は、下堅杉町54番戸の自宅を金城女学校に譲って転居した。

ランドルフの教育方法は厳格であった。毎日新しい英語を教え、次の時間に一人ひとりに言わせた。答えられない生徒にはどしどし座席を変えた。最前列が優等生の座席であった。最前列を目指して生徒たちは一生懸命に勉強し、驚くほど進歩を遂げたという。

## 濃尾地震の影響

1891(明治24)年10月28日、マグニチュード8.4という内陸最大の濃尾地震が起こった。死者7,273人、全半壊の家屋22万2,500余戸という大きな被害

が出た。キリスト教関係者の死者も4人、負傷者が8人出た。マカルピンは自宅を臨時の医療所として解放し、宣教師のウィンビシュは病人や負傷者、孤児たちの看護にあたり、自宅を孤児たちに解放した。このときのキリスト教者らの救援活動は名古屋市民から好感を持って受け入れられた。しかし、余震により1892(明治25)年4月ごろから神経衰弱で体調をくずしたランドルフは、同年11月退職し、休暇で帰米するマカルピン夫妻とともに帰国することになった。

送別会でランドルフのために創作された詩が読まれ、生徒一同は友禪縮緬ゆうぜんちりめんのテーブルかけを贈った。そのとき眼光鋭いランドルフの目に涙が光った。汽車が名古屋駅停車場から動き出したとき、生徒一同は声をあげて泣き、汽車が見えなくなるまで頭を下げていたという。厳しかったが生徒たちに慕われていたのであろう。

1892(明治25)6月、岩永義太郎が第二代校長に就任した。同年9月、校則を改正し、高等科(1年制)を新設する。これが後の高等教育機関としての金城女子専門学校へとつながっていく。

#### 参考文献

『金城六十年史』

『金城学院八十年史』

『金城学院百年史』

『目で見る金城学院の100年史』

神辺靖光『女学校の誕生』女子教育史散策 明治前期編

刑部芳則『セーラー服の誕生 女子校制服の近代史』

# 大東文化大学『大学改善委員会報』第24号(1983年11月)

## — 新学部の増設と大学の展望 —

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

1986(昭和61)年4月、大東文化大学に新学部である国際関係学部(国際関係学科・国際文化学科)が開講された。この新学部設置にあたっては、いったん増設申請を取り下げるなどした経緯があるが、残念ながら従来の大学史ではこの点がなんら明らかにされていない。今回、その経緯を垣間みることができ資料を紹介したいと思う。初期の新学部増設に携わった教授関係者らに対し、大学改善委員会がこの経験を教訓として「忘れてはならない」として、ヒアリングを行い、申請がいったん取り下げとなった事情などについて、同会報(第24号)で記したものであった。

\*\*\*\*\*

### 新学部の増設と大学の展望

一昨[1981]年より学園の長期事業計画が日程に上り種々の企画が提示・実行されている。教学がもっとも関心を示している計画には「国際政治経済学部」の増設がある。これは今計画の最重要課題として学園より出されたが、今[1983]年度は申請を取り下げたと聞く。もっとも、学部増設案が学園から提示された段階でさまざまな疑問を生み、かならずしも全学部の支持が得られたわけではない。その疑問として既設学部との関連や現状維持で質的向上をはかるべきだなどであるが、後者について学園側の主張は長期安定経営をはかるため一万名(損益分岐点)の学生確保が必要というところにあった。この経営の論理は経営権に属するから強行されればやむを得ない段階まで来ていたので、改善委員会は会報23号で拡大構想が推進されるより大学の特性を活かし得る学部増設であるべきことを望んだ。およそこの新学部の中身を教学側はどれだけ関心を示し討議したか、またそれにはどのような理念と展望とがあったのか、このも

っとも重要な中身は無視されていたのではないかと、経営の論理を前面に押し出し構想そのものを一方的に押し付ける学園の姿勢は軽挙である。経営と教学との十分な信頼と話し合いがあって、はじめて大学の新たな展望は拓かれるはずであり、この原点は忘れてはならないと思われる。

### 新学部増設申請の取り下げとその理由

改善委員会は、学部増設申請の取り下げに対しそれが経営上のみでなく、大学全体におよぶ重要な問題であると思い、新学部増設に係わった元メンバーの教授複数と会見し、今回の取り下げとなった理由の説明を受けた。元委員らはその大きな原因として次のような点を指摘している（要約）。

I 事務レベルでの対文部省交渉に甘さがあったのではないかと（情報収集の不足）：たとえば、行政改革による文部省自身の指導の変化など

II 農地転用許可を増設の許可の如く錯覚したのではないかと（初歩的錯誤・楽観）

III 基本構想の段階で既設学部との関係が慎重に討議されていなかったのではないかと（必然性の欠如）

IV 文部省指導をも含む各学部内部充実が増設認定の前提であるという認識がなかったのではないかと（取り組み姿勢の希薄）

そして、文部省の指導は、

A 「国際政経学部」の設置基準はまだできていないこともあり今回は不可

B 既設の経済・法学部との関連を明瞭にすべきである

ということにあったようである。したがって、今回の申請は設置審の審議以前の文部省との窓口指導段階で不発となったと思われ、申請の結果の不認可ともいえない初歩的問題にあったようである。なお噂ではこの原因を委員の「仕事の遅れ」ともいうが、元委員は期日とおりに書類作成は完了していると述べている。もっとも原因が先の I～IVにあるとすれば真の原因は別に存在する。先の申請の取り下げにより、確保された人材が白紙撤回されたという。それにより委員個人の信用問題はもとより、大学の対外信用も大きく失墜させることとなった。

## 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(11):

### 『全国学校案内』(明治42年)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、内外出版協会より刊行された高橋都素武編『全国学校案内』の1909(明治42)年のものを取りあげる。すでに1908(明治41)年のものを検討済みなので、それと同一のものはそのように示し、変更箇所があったものは変更箇所を示すことで、情報の変化も合わせてみていくことにする。

1909(明治42)年のものは高橋が編者を続けていることもあり、本稿で取りあげている予備校に関しては、掲載された機関に変更はなく、情報に動きがあったのは私立模範英語学校のみである。以下には、唯一掲載内容に変更があった私立模範英語学校の情報を示す。

#### 私立模範英語学校(東京市神田区裏神保町九)

本校は明治三十七年の創立であつて、有名なる高橋五郎氏教務を主宰し、其目的は最近着実の新教授法によつて、模範的に実用の英語と完全なる英文学とを教授し、又実業家と気脈を通じて卒業後就職の便益をはかり、殊に米国渡航者の為めには種々周旋の労を取るといふに在る。課程を大別して夜学部及び午後部の二種とし、更に夜学部を分ちて普通科(中学程度)、夜学科三年級(兼受験科)、及び高等科(英文学科兼教員養成科)とし、午後部を分ちて受験科(中学卒業程度)及び高等科(夜学部と同じ)として在る。講師は高橋五郎氏以下、永井、舟橋、高野、蜂屋等の良教師多く、其成績に於ても都下の英語学校中出色の称がある。但し本校の如く、徒らに他を漫罵して自家の完全をてらひ、皇張誇大以て自ら得々たるは誠むべきである。

変更箇所は校主の藤生金六の記述がなくなり、出講講師からも藤生の名前がなくなっているという点だけである。藤生の逝去にともなう変更ということだろうが、藤生金六は1907(明治40)年7月13日に逝去している。1908(明治41)年の『全国学校案内』が刊行されたのは3月だから、情報の更新が遅かったということになる。もっとも、版を組む時間も勘案すると、高橋が原稿を執筆したのは藤生の逝去の前であった可能性は残る。

次号では、同じく内外出版協会から刊行されるも、編者が変わった1911(明治44)年の『最新全国学校案内』に掲載された情報を検討していく。

## 『嘉納治五郎』(1964年)を読む(4) 木下広次による

### 第一高等学校校寄宿舎自治制導入に関する嘉納の見解(その2)

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

#### はじめに

『嘉納治五郎』(講道館、1946年)で注目したトピックを紹介する本シリーズで、第121号では、嘉納治五郎が、木下広次の寄宿舎自治方針について述べた見解の前半を紹介した。本号では、この続きを書きたい。前号と同様、『作興』第8巻第9号(講道館文化会、1929年9月発行)に掲載された「教育家としての嘉納治五郎(七)」を史料として利用する。

#### 指導監督の行き届かない寄宿舎自治を批判

前号では、木下広次による第一高等学校校寄宿舎への自治制導入について「必ずしも間違ではなかつた」と嘉納が述べたことを紹介した。しかし、嘉納によれば、木下が導入した寄宿舎自治は問題の多いものでもあった。

以下の史料で、嘉納による第一高等学校校寄宿舎自治の批判内容が述べられている。嘉納による批判の主な趣旨は次の点であった。

- 1) 生徒の寄宿舎生活が、強制ではなく自治を基本に行われることは重要だが、校長の理想に基づく指導は、その前提として必要である。もしも、最初から指導が不要であるのなら、生徒は知識面以外の教育を必要としない、ということになってしまう(しかし、そのようなことはありえない)。
- 2) 木下校長の教育には理想がなかった訳ではないが、漠然としていた。
- 3) 間違った行動をしてしまった生徒に対する「制裁」が、学校の指導として行われずに「生徒各自が勝手に制裁を加」える傾向が極端になっていた。
- 4) 寄宿舎内の清潔や整頓が行き届いていなかった。この状態は、決して良好な教育とはいえない。

では、嘉納は第一高等中学校についてどのような教育上の理想にもとづいて、どのような寄宿舎教育を行おうとしたのだろうか。

前号でも述べたように、嘉納は約3ヶ月間しか第一高等中学校の校長を務めていない(1893年6月15日から9月19日まで。なお、前号で「1893年1月から3ヶ月間」と書いてしまったのは、「1893年6月から3ヶ月間」の誤りだったので、訂正したい)。そのため、高等中学校の寄宿舎に関する嘉納の具体的な教育内容を知ることは容易ではない。おそらく、1891年8月から1893年6月まで第五高等中学校長を務めていたときの嘉納の教育がヒントとなるだろう。

次号では、嘉納の第五高等中学校時代の教育を見ていきたい。

---

さりながら、此自治には又、大に其弊も伴つて来る。もし生徒に全然自治せしむるならば、校長といふものは眞実教育者としての職分を尽すことが出来ないといふことになる。もし自治がよく出来るならば、生徒は知識を受け入れることの外には、教育を受ける必要がないといふことになる。苟も学校である以上は、学校長が其生徒を指導するのが当然である。校長といふものは、予め有する理想に到達する様に生徒を薫陶すべきである。其理想、其方針に従つて、生徒はそれぞれ己れを磨く。それを一々他の指図を受けず、即ち強制せられずして自ら行つてゆく、それが自治でなければならぬ。然るに、在来の高等中学校に於ては、其理想といふものは全くないではないが、余りに漠然として居たとおもふ。又、偶々間違を起した生徒に対しては、正しき自治の精神に基づける学校の制裁によらず、生徒各自が勝手に制裁を加ふるといふことが度にすぎ、自治の精神を誤つた。勿論、学生社会のみならず、何れの社会に於ても、相互の制裁といふことに力を借り、必ずしも一々監督者の制裁をまたずに過を改むべきは論をまたざる処ではあるが、第一高等中学校に於ける自治教育に於ては、それが余りに極端に走り過ぎて居つた。又、生徒を悉く寄宿舎に収容するといふ大体の方針であつたが、其寄宿舎内の清潔・整頓は甚だ不行届であつたが如きは、決して善い教育の跡と

は請取れなかつた。自分は、木下氏と懇親の間柄であつたから、これ等の意見を露骨にのべて、かゝる弊風を一洗して、真の訓育の出来ることにしなければならぬといふ自分の方針を木下氏に告げ、指導監督の行届かざる徒らなる自治を避くべき旨を述べた処、木下氏も之に賛成し、是迄は已むなく、先づ以て行つた方法であるといはれた。自分も之を諒とし、時勢に應じて先づ行へる適當なる仕方と考へて居るのである。

此改革を行はんとすることはなかなか困難なことである。生徒は各地方から集まつて居る秀才揃ひであり、教師は自分の門下生ではない。それぞれの意見を有する学者である。久原教頭の如きは、大学に於ける自分の先輩であつた。此等の人々と方針を一にするまで協議を凝らして、生徒に臨まなければならないのである。併し自分は、教育の真の途は自分のさきに述べた考の通りで間違はないと信じて攻究を遂げ、且つ実施を企てたのである。

---

## 神辺靖光会員邸における研究交流会（2025年2月2日）の報告

あめみや かずき  
雨宮 和輝（高崎商科大学）

2025年2月2日の午後、神辺靖光会員の御宅にて研究交流会が開催された。今回の研究交流会は神辺会員と長本会員の新著『百花繚乱 日本の女学校：女子教育史散策 大正・昭和初期編』（成文堂、2025年）の刊行に伴って開催されたもので、前著『花ひらく女学校：女子教育史散策 明治後期編』（成文堂、2021年。以下『花ひらく女学校』と表記）を、指定された会員が通読し、担当者として気になった点や疑問点について著者と直接対話するというものであった。



以下、当日のやり取りについて報告する。なお、神辺会員、長本会員以外の参加者は富岡会員、谷本会員、田中会員、雨宮、オンラインでの参加は杉山会員、猪股会員である。（以下、すべて「〇〇会員」表記）

最初の担当者の富岡会員は『花ひらく女学校』を読んだ上で、筆者である神辺会員の実体験が示されているのは、類書では見ることのできない貴重な特徴であると感じると指摘した上で、本文中の「昭和初期の小学校・中学校で、教員は徹底的に天皇及び皇室を敬遠した」（93頁）という部分に関して、当時の学校教育では、教員は「天皇」という存在とどのように関わっていたのかと質問した。この質問に対して神辺会員は、教員は天皇についての言及を極力避けるような状態であり、修身の授業の際には、仕方なく天皇について言及するような雰囲気であったと述べた。かといって、誰も天皇について触れていなかったというわけ

ではなく、公の場でなければ天皇にまつわる一種「下世話な」話もしていたと当時を回顧した。

続いて、富岡会員は、女子教育の趣旨や目的に関連してしばしば言及された「良妻賢母」というキーワードに興味を惹かれたと述べた。特に明治後期に女子教育を語る文脈において論じられる「良妻賢母」が近世までの『女大学』的な考え方とは異なるものだったのか、すなわち、その内実がどういったものであったのかについて質問した。

この質問に対して神辺会員は、東京や大阪といった都市の女子は当時も流行に非常に敏感であったことに触れた上で、流行に敏感な女子たちは新しいもの好きであったため、学校という「新しいもの」にも大きく興味を示したと話した。そのような新しいもの好きな女子たちをターゲットにしたのがミッション系の女学校であり、キリスト教系の学校が多く女子生徒を受け入れるようになった一方で、これに対して大きな危機感を覚えたのが仏教界であったこと、そして、仏教界とキリスト教界で女子生徒を巡って取り合いが行われるようになった状況下で、女学校は音楽やダンスなど、様々な「新しいもの」を取り入れていくようになった、と整理した。したがって「良妻賢母」はスローガンのようなもので、その具体的内実や統一的意味合いを探ることは困難なのではないか、と神辺会員は述べた。

次の担当者である田中会員は『花ひらく女学校』の第二部について、第一章で扱われた明治女学校が、なぜ、女子高等教育のさきがけであると位置づけられるのか、また、明治女学校の生徒数が減っていき、その後、閉校となってしまうのは何故なのかについて質問した。

これらの質問に対して長本会員からは、明治女学校は巖本善治が中心になって運営した学校であり、当時一流の教



研究交流会の様子 1

員を集め、男子中学校のような英語や普通科目を教授する学校であったこと、第1回卒業生が出る明治22年に3年制の高等科をスタートさせ、同志社女学校や師範学校女子部卒業生らが入学したこと、ここで学んだ羽仁もと子や相馬黒光、野上弥生子らの著述などからレベルの高い授業が行われていたことが窺える。ただ、その経営には女性の啓蒙と地位の向上をめざした雑誌『女学雑誌』が明治女学校の宣伝機関誌のような役割を担っていたため、その『女学雑誌』が明治37年2月第526号で事実上廃刊となったことが明治女学校閉校の一因となってしまったと述べた。

また、女学校に関連する話題として、富岡会員から仏教系の女学校等に関して何かあるかと著者（雨宮）に対する質問もあった。この際、著者は仏教系女学校そのものに関してはあまり詳細に述べることができなかったが、なぜ、明治女学校は専門学校としての認可を求めずに廃校となってしまったのかを長本会員に対して質問した。長本会員はこの質問に対して、そもそも、専門学校令が制定される頃には、地主の死や火災により二度の移転を余儀なくされたことによって、財政的に厳しくなっており、専門学校として認可申請に必要な条件を整える体力がなかった。本来なら普通科を卒業して高等科に進学する生徒たちが、女子英学塾や日本女子大学校などの専門学校へ流れていくようになったこと、さらにはじめから専門学校がある高等女学校に入学する生徒が増え、明治女学校への入学者が減少した。また、校長を務めていた巖本善治によって全盛期を迎えていた明治女学校であるが、島崎藤村が教壇を去り、北村透谷が自殺し、女学雑誌社から出していた雑誌『文学界』の文学青年たちが巖本と意見が合わず独立し、離れていったこと、右腕だった星野天知も巖本の本性がわかり辞職したことなどが閉校の結果につながってしまったと述べた。この明治女学校の閉校と関連して、戦前において閉校・廃校となった学校についての研究は、未だ少ないのではないかといった意見も出た。

そして、長本会員の担当部分に際して、神辺会員より次のような補足があった。すなわち、当初長本会員の作成した原稿は長大で、背後にある綿密な調査の存在が窺えるものであった。しかし、この『散策シリーズ』は、教育史の専門家に向けて書く専門書ではなく、むしろ、他の研究者や一般の読者を対象として作成した著作であるため、この趣旨に則って、元の原稿にあった詳細は大幅に削られていると述べた。



研究交流会の様子 2

上述した話題の延長で、教育史を研究する上では一体どのようなことを書いたらよいかという議論がされた。神辺会員は『散策シリーズ』は一つの実験として作成しており、やはり、教育史に取り組む上ではどのようなことを書くべきか考える必要があるとの意見が出た。書くことは無限に存在するが、どのようにして、書く内容をコンパクトにするのか、また、学校史などを書く際にも、学校を建てる時に、誰が建てたのか、何を中心としたのか、財政はどこが出したのかといったことを考える必要はある。ただ、そういった細かい部分ばかりに注目しすぎても意味がない、もっと視野を広げ、学校を社会の中で見るような視点を持つことが重要であるという意見が出た。また、時代によって書く内容がさらに変わってくるといったことに言及した上で、さらに最新刊である『百花繚乱 日本の女学校：女子教育散策 大正・昭和初期編』では、戦中という時代をどのように書いていくのかといったことが大きな課題として残ったと振り返った。神辺会員の教育史に対する深い造詣と、教育史という研究分野が今後どのように取り扱われていくべきであるのかを考えさせる内容であった。

良妻賢母や女子教育に関連する話として、現在の学生に対してどのように興味を持たせることができるのかという話題について、谷本会員からは、過去に自

身が執筆、参加した『新訂わかりやすく学ぶ教育制度』での執筆担当部分をレジュメとして取り上げながら、その問題についての言及があった。レジュメの内容については、主に関東以北に残っている男女別学公立高校の話題などにも言及し、大学生に対して、ジェンダーや男女平等などの現代的な問題を皮切りとして、教育史的な問題に興味を持ってもらうことができるのではないかと提言した。(ちなみに、筆者はさっそく『新訂 わかりやすく学ぶ教育制度』をAmazonで購入した。拝読したところ、教育制度についてわかりやすく書かれていたので、谷本会員の執筆担当部分を中心に、是非、自身の授業教材などの作成の際に参考とさせていただくようにしたい)

そして、神辺会員が考える今後の研究課題としては、戦後の日本、朝鮮戦争を契機として大きく変化した日本について考えてみる必要があるのではないかと、また、戦後においては特に短大について、短大が成立するまでの経緯やその後などを取り上げてみてはどうかと神辺会員が、今後の課題として提起した。その場合にもあらゆることを書くのではなく、視点を決めて書くことが重要であると述べた。この意見に対して、富岡会員からも、他分野の人にも教育史を理解してもらうように、あるいは教育史がどういった学問であるのかをわかってもらうようにすべきであるという意見が出た。

閉会の時間が迫ってきた終盤部分、オンライン参加の会員に対しても意見が求められた。今回初参加となる杉山会員は、自身も日本教育史の専門家ではないという立場から、やはり、専門家でない読者に読みやすい書籍の意義は大きいと思うという意見を述べた。また、杉山会員の研究対象であるフランスにも、戦前日本の教育関連史料が多くは手つかずのまま残っているので、日仏交流史のような形で研究もしてみたいと述べた。さらに神辺会員に対しての質問としては、良妻賢母という考え方は日本においてはいつ頃から出てきたのかといった質問をされた。この質問に関して神辺会員は、やはり日露戦争の頃からではないかと述べた。日露戦争の頃から、特に都会の駅などに女性が出てきて、女性の性質が変わってきたのではないかとこの考察であった。そして、長本会員に対しては、成

瀬仁蔵は日本女子大学校創立に際して、なぜ政財界の大物たちの賛同を得られたのかと質問をした。それに対して長本会員は、成瀬は「女子を人として、婦人として、国民として教育する」という女子高等教育の方針などを記した『女子教育』を執筆し、「日本女子大学校設立之主旨」を携えて、まず同郷の先輩で当時大阪府知事であった内海忠勝を訪ねた。さらに奈良県の豪農土倉庄三郎を訪ね、実業家広岡浅子や住友吉左衛門、総理大臣・伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一というように名士から名士へと相談すべき人物を紹介された。訪問時には成瀬が明確な理想を述べており、また、納得してくれるまで何度も足を運んだ結果、当時の政財界の重要人に会うことができ、賛同を得られたのだと思うと述べた。

猪股会員からは、まず長本会員に対して、東京女医学校については、周りも巻き込んで大きな騒動であったと言及した。これに対して長本会員は、その原因として、女子が学べる医学校が少なかった上に済生学舎が女子を締め出したこと、当時は女子に医者の仕事を取られたくないという考えを持つ医者が多かったことなどが考えられると述べた。さらに明治39年に公布された「医師法」によって、それまでだれでも受けられた医師試験が専門学校卒業者でなければ受験できないことになり、8年後には従来の医術開業試験が廃止されることになった。そのため東京女医学校はどうしても専門学校に認可されなければならなかった。しかし、申請してもなんの音沙汰もなかった。文部省は女医の必要を認めず、女子の高等教育機関を不必要なものとして申請を黙殺した。再三の申請により1年経ってようやく視察官が来校したものの何の指示もなく、最初の申請から1年2ヶ月経ってようやく必要な条件が指示された。1年かけて条件に従って増改築し、再申請したが、学校の規模や設備等が不十分としてさらに多くの条件が指示された。無理難題を押し付けて、医術開業試験廃止となる期限を待っているかのような、時間稼ぎのようなことをしたのではないかと述べた。また、神辺会員には、自身の研究対象である教科外活動について、そもそも、女学校の学生がどの程度学校に滞在していたのかが気になったと述べた。また、それに関連して学校の学生に対する役割とはどのようなものかとも疑問に感じたとして述べた。これについて

神辺会員は、自身の経験としても、現在の学校においても、学生が学校に長時間滞在するのも問題ではないかと述べていた。ただ、子どもの生活の場を考えた場合には、クラブ活動の必修化時の問題も取り上げた上で、その状況に合わせて考えていく必要があると述べた。オンライン会員への質問の終了を以て、4時間にわたる研究交流会は閉会となった。

以上、研究交流会における話を抜粋してまとめてきた。今回の研究交流会では、神辺会員の提起した話題にもあったように、教育史とはそもそもどのような内容を執筆する学問なのか、そして、教育史を他分野の人間にも理解してもらえるようにするには、どのような内容を書いていくべきでないのかといったことを考えていく必要があるという内容が、筆者にとっても非常に印象に残った。自身も教育史を専門とする研究者の一人である以上、今回の研究交流会において、子細に至るまで研究成果をあらゆる形で示すのではなく、自分の視点を以て、研究成果を他分野の人にもわかりやすいような形で記載していくことが重要であると改めて考えることができたのが、今回の研究交流会での一番の収穫であったと、筆者は考える。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の典拠を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

---

## 短評・文献紹介

---

布施賢治さん(山形県立米沢女子短期大学)著「庄内と育英事業 庄内同郷会と旧藩・群などの関係から」(『出羽庄内の風土と歴史像』2012年)のなかで、「教育史においては、近代社会において地域の中学校が学生の社会移動に果たした役割の研究、地域における中学校設立問題を民権運動と連動させて論じ、運動家や地域豪農と国家や県令・郡長との教育観の対抗構造のなかから地域の独自の教育要求の高まりと最終的な国家の教育制度への統合の過程が明らかにされる。しかし、視点が数量的、制度史的、民権運動的な面で捉えられがちであり、同時代の制度的教育や政治の影響をうけつつもそれから自由でもある青年層や学生層の独自の動向や視点が見落とされがちである」と端的に記されている。

このような指摘は重要であると思われるが、近年の教育史研究においてはNL 同人である小宮山道夫さん(広島大学)著の「加能越三州の学生寄宿舎『久徴館』およびその同窓会組織に関する考察」(『地方教育史研究』第43号、2022年)や「近代日本における進学行動の定着過程に関する研究:学習者の動態把握を中心として」(広島大学博士論文、2022年)などに代表されるとおり、布施さんが重要と指摘した点についても、しっかり研究フォローされているように感じられる。小宮山さんをはじめ同人のみなさんも、どう感じるのでしょうか。(谷本)

北村隆志・木村孝・澤田章子著『名作で読む日本近代史』

本を読めと言われても、何を読めばいいのかわからないという若者におすすめの一冊。夏目漱石、福沢諭吉、森鷗外、樋口一葉、内村鑑三、与謝野晶子、徳富蘆花、石川啄木、幸徳秋水、志賀直哉、宮沢賢治などそれぞれの名作が紹介されている。33章からなる200ページ余の本で、各章とも6ページほど。三人の著者の読みやすかつ美しい筆致はどこから読んでもおもしろい。しかし最初から読むとおのずと明治・大正の社会情勢や思想の流れが学べる。高校国語の教科書から文学的文章が追いやられた昨今、サブテキストに持たせたい一冊である。きつと読みたくなる本に出会えることと思う。

2025年1月、学習の友社刊、1,500円(税別)(長本)

日本の公立小学校での特別活動の様子を取材した映画「小学校 それ小さな社会」(山崎エマ監督・編集、2023年)がフィンランドをはじめとした世界中で話題になっているというので、観てきた。この映画の公式サイトに、次のような紹介が書かれている。「イギリス人の父と日本人の母を持つ山崎エマ監督は、大阪の公立小学校を卒業後、中高はイ

インターナショナル・スクールに通い、アメリカの大学へ進学した。ニューヨークに暮らしながら彼女は、自身の“強み”はすべて、公立小学校時代に学んだ“責任感”や“勤勉さ”などに由来していることに気づく。[略]1年間、150日、700時間(監督が現場で過ごしたのは4,000時間)に及び撮影と1年を要した編集を経て完成した本作には、掃除や給食の配膳などを子どもたち自身が行う日本式教育『TOKKATSU(特活)』——いま、海外で注目が高まっている——の様子もふんだんに収められている。日本人である私たちが当たり前に行っていることも、海外から見ると驚きでいっぱいなのだ。」。

小学校生活を観察し、何に注目し、何をとり上げないのか、取捨選択にはいろいろなバリエーションがあると思う。日本式教育『TOKKATSU(特活)』に注目したというのが、特別活動で私がイメージする話し合いによる合意形成や、自主的な活動という側面よりは、教師がさまざまな苦心をしながら低学年の児童に集団生活を日々体験させていくシーンが中心であった。それが海外で反響を呼んだことは興味深い。このことの意味をじっくり考えてみたいと思った。

ないものねだりになってしまうが、映画の舞台になった東京都世田谷区の公立小学校の歴史についても、もう少し注目されてもよいのではと感じた。今見えているものを深く知る上で、やはり歴史的アプローチは有効だろう。戦後の民主主義教育のなかで、特別活動の前身である特別教育活動にどのような期待が寄せられ、どのような学級活動が行われていたのか、それがどのように変化したのか、あるいは継続したのか。もちろん、これは山崎エマ監督一人の課題というよりは、教育史を研究する私たちが何を研究し、研究成果をどのように社会に伝えているのか、という問題なのだろうと痛感した。以下は、公式サイト <https://shogakko-film.com/> のトップページより。(富岡)

教育大国フィンランドでは20館の拡大公開で大ヒット  
——海外からの熱いオファー続々と!

# 小学校

～それは小さな社会～

いま、小学校を知ることが、  
未来の日本を考えること。

a film by  
Ema Ryan Yamazaki

THEATER  
劇場情報

12.13  
全国順次公開!

私たちは、いつどうやって日本人になったのか? ありふれた公立小学校がくれる、新たな気。

RECOMMEND FILMS  
感想・推薦コメントを  
お寄せください!!

---

## 会員消息

---

この春から、八王子にある私立大学に非常勤講師(日本教育史)に赴くこともあって、当該大学の教務クラウドにてシラバスのweb入力作業を行いました。同時に留学生らのためということで英語での入力作業も行わなければならないといへんでした。また本務先でも給与明細のペーパーレス化は数年前から始まっていますが、当該非常勤先では人事クラウドにて、当該組織の理事長と結ぶ非常勤講師担当契約書を、webで自ら署名する作業を事前に行わなければならない、これには正直戸惑いましたね。おそらく、当該大学のジムの非常勤の交通費手続き(web申請処理)を早めに行いたいことなどもあるのでしょう。当該大学のしおりを拝見したところ、非常勤講師の出勤については交付カードを介して出退勤を指定ゲートで自動手続きを行うとなっており、当該大学生らも普段の授業では学生証にて受講履歴が認証されるシステムだそうです。しおりによれば、授業出席が芳しくない学生に対しては所属学科の専任教員らが迅速に指導を行う・とも記されていました。大学の違いによって、ジムの諸手続きや学内での日常慣行もいろいろ違いがあり、なるほど便利で納得できる点もあれば、うーんそれはどうでしょうと首をかしげる点もあるようにつよく感じました。(谷本)

2025年度の東京大学(前期)「日本史」の第4設問は、面白いです。当初の学校教育において「唱歌」を実施しないとされた理由は? 掲げられている史料を読みとれば、気づくのですが、高校生がこれを答えるのかと驚きました。日本史は、山川出版社の教科書と用語集をすべて丸暗記…という時代から、入試問題も変わりましたね。(山本剛)

先日、嘉納治五郎関係の史料閲覧のため、東京都文京区、後樂園球場近くの講道館を再訪しました。講道館は嘉納治五郎関係史料の収集・整理に力を入れていて、付設されている資料館・図書館には嘉納関係史料を熟知した職員さんもいますので、新しい発見があって楽しいです。展示も興味深く、見やすいです。みなさんもぜひ。(富岡)